

「自国で金 かなえて」

五輪まで1か月

ソフトボール 元日本代表監督

宇津木妙子さんに聞く



日本代表にエールを送る宇津木妙子さん

7月23日の東京五輪開幕まであと1か月に迫った。

高崎市在住で、ソフトボール元日本代表監督の宇津木妙子さん(68)に、大会や選手への思いを聞いた。

ソフトボール日本代表は開会式に先駆けて、7月21日に福島県で豪州との初戦に臨む。

「東日本大震災からの復興を世界に伝えるとともに金メダルを獲得し、後に続く他の競技へ勢い呼び込む」

うつぎ・たえこ 1953年4月生まれ、埼玉県川島町出身。日本リーグ1部で選手として活躍後、日立高崎(現・ビックカメラ高崎)監督も務めた。五輪の日本代表監督としては2000年シドニー大会で銀、04年アテネ大会で銅メダルを獲得した。11年にNPO法人「ソフトボール・ドリーム」を設立し、競技の普及に取り組んでいる。

「でほしい」

ソフトボールは3大会ぶりとなる。見所はどこにあるか。

「新型コロナウイルス感染拡大の影響で、1年延期されたが、選手は気持ちを切り替えられた。野球より狭いグラウンドでのスピード感あるプレーや、多彩な変化球を駆使する投手と、配球を読む打者の駆け引きを見てほしい」

2008年の北京大

会に続く金メダルを目指し、日本代表は高崎市内で合宿に汗を流している。

「普段の取り組みのすべてが出るのが五輪の舞台だが、決して努力は裏切らない。自国開催というめったにない舞台で、選手たちは金メダル獲得という夢をかなえてほしい」

真夏の中、米国、豪州などと激しい戦いが予想される。

「米国に敗れたシドニー大会は決勝まで無敗だったが、監督の自分が投手交代のタイミングを逸したのが敗因だ。選手と自分、どちらが先に倒れるかわからないまで追い込んだ練習をして臨んだだけに、今も悔いが残る。油断が少しでもあると勝たせてくれない。自分、チーム内のライバル、そして相手と戦った先に頂点がある」

(聞き手・黒羽泰典)